



粉体技術に夢を託す

ホソカワミクロン株式会社 宮田 清巳

我々が標榜する「粉体技術」には、夢があり、無限の可能性がある。

「粉体は魔物」、「粉体技術は経験工学」と言われてきたが、「粉体」と言う言葉は、著名な物理学者であり随筆家でもあった寺田寅彦が、1933年に発表した「自然界の縞模様」という随筆で初めて使ったと言われている。しかし、現在でも、「粉体」と言う言葉は「広辞苑」にもなく、パソコンを叩いても出てこないが、いずれにしても、若い技術、若い産業であり、大いに成長が期待できると思う。

我々の身の周りにある多くの製品が「粉体」からできており、それらが絶えず高機能化されることによって、新しい複合材料や機能性材料が生み出されている。これからも、環境、エネルギー、食品、医薬を初め、あらゆる分野において、より高度な「粉体技術」の要求は高まってくるだろう。

しかし、その中において、人材の流動化が激しい昨今、「粉体技術」の継承ということが重要な課題になってきている。我々の「粉体技術」は、マニュアルなどで簡単に答えを出せるものではないことから、人材の育成には、非常に難しいところがある。

人材の育成には、しっかりした基本の教育とOJTが非常に重要になってくるが、私は、日本企業の特徴とも言える「終身雇用」の考え方が「粉体技術」においては大切なのではないかと考える。じっくり長く、しっかりと若い人を育てていくことが大切である。

我々が携わっている「粉体技術」は、仕事として奥が深く、人生の仕事として、大変素晴らしい仕事であることを若い人たちに伝えていきたい。

しかしながら、最近の新入社員は、一流企業においても、わずか3年で大卒30%、高卒50%が会社を辞める。小さい時から、親から勉強、勉強と言われ、頑張って、頑張って、一流大学に入り、一流企業に入社する。そのことを、親から褒められ、親戚から褒められ、近所から褒められ、友達から褒められ、そして、先生から褒められる。多くの人が、一流企業に入社することが一番であるように思っている風潮がある。一流企業は倒産の心配も少なく、安定しており、それが安心、安全指向に繋がっている。しかし、大きな夢と希望を

持って一流会社に入社しても、大企業の一員として、厳しい環境の中、こんなはずではなかったと、ただ単に嫌になって、なんとなく、あっさり辞めていく。

人それぞれの能力に違いがある。勉強のできる人、運動神経抜群の人、芸術的に卓越した人、匠のような人……いろいろな人によって社会が成り立っていて、そこには、いろいろな人生、その人だけの人生があるにも拘らず……。

今回の不況は、100年に一度の大不況と言われているが、日本の風土、土壌も大きく変化するように思う。

年収200万円以下の人が1,000万人、非正規労働者が1,700万人、貯金ゼロの人が20%、ニート、フリーターが200万人。そして、世界では毎年8,000万人もの人口が増えているにもかかわらず、日本では少子高齢化で人口が減少している。

そうした中で、国民が不安に思い、1,500兆円の個人金融資産が貯蓄にまわっている。1,700社の一部上場企業の時価総額でも300兆円以下であり、極論すれば、日本の個人金融資産の20%で一部上場企業を全て買うことができる。

現在、中国、韓国を初め、東南アジアの人々は、少ない休みで、一生懸命に働き、そして、一生懸命に勉強をしている。このままでは、いずれ日本は多くの分野で、中国、韓国に追い付かれ、そして追い越されていくように思う。日本だけが、給与が高く、休みが多く、退職金が多く、年金が多く……そんな訳にはいかない。

グローバル社会の一員として、日本の良さ、日本人の良さを見直し、日本独自の仕組み作りが必要なのではないか。

自分の仕事に精を出して、定年まで真面目に働き、税金もしっかり納めておれば、せめて、老後の生活において、贅沢しないまでも、最低限、生きて行くことができるような、国民が安心を持てる新しい仕組みがいるように思う。

みやた きよみ
宮田 清巳
ホソカワミクロン(株)
代表取締役社長 CEO